

子どものしつけにおける性差

—親と子どもの意識にみられる男の子・女の子のしつけ—

愛知教育大学家政学教室 久世 妙子
瀬戸市立祖東中学校 津田 聖子
(昭和59年12月24日受理)

1. はじめに

しつけという言葉に「身を美しくする」といった「躰」が国字として当てはめられるようになったのは、室町時代頃からだといわれている。それ以後、貴族、武士、町人、農民といった階層により、しつけの内容は異なってきた。そして、現在では日常生活の行動様式や生活習慣を身につけさせるといった意味で用いられるようになった。

そして、それらのしつけ内容は、年齢や性によって異なり、特に性別によるしつけのちがいは、以前より減少してきているものの、どこか意識の中で「男の子はこうあるべきだ」「女の子はこうでなければならない」といった男女の差がしつけの中に現れているように思われる。もちろん男女それぞれが持って生まれた生理的・生物学的性別特性というものはある。それによってしつけの性差が出現するのは当然のことであろう。しかし、それだけでなく、社会が要求する人づくりのためのしつけ、教育によって性差が作られている部分もあるのではないだろうか。子ども時代に身についた行動様式や生活習慣はその人の将来を左右するものであり、しつけの性差は男女の社会的役割にもつながるものであると思われる。本研究では、我国におけるしつけの男女差の由来と現在の児童・生徒の実態を明らかにしたい。

教科教育において、これらしつけ教育の内容は家庭科教育の保育領域で取り上げられている。しかし、単に社会性の発達、ことばの発達、生活習慣などといった個々のものとしてしか取り上げられていない。しつけは、これらすべてのことと関連した人間形成の問題である。そこでしつけの性差の実態をもとに、保育領域での取り上げ方について

考えていきたいと思う。

2. しつけの性差に関する文献的研究

(1) しつけと性差

しつけという言葉には様々なとらえ方がある。ここでとらえるしつけは、育児という人間の行動に含まれ、礼儀作法だけでなく、基本的な生活習慣や生活技術の習得も含まれた広い意味でのしつけとしてとらえたい。育児とは、未成熟で生まれてくる子どもの生命を守ることであり、もう1つは子どもがのちに社会の一員として生活する上に必要な生活様式を身につけさせることであるとすれば、しつけは生活する上に必要な生活様式を身につけさせる方に属する。食べ物を与えたり、抱き上げたりする育児行動は、人類以外の動物にも見られる行動である。しかし、人類はその生活を社会固有の文化に依存している度合いが大きいので、文化そのものを身につけなければならない。これが人類特有のしつけという行動になる。

そして現在、しつけの研究は、社会学、家族関係学、心理学など各分野で行われている。そしてしつけに対する考え方は、学問的立場や個人の研究者の理論によって差異がみられる。これらを大きく分類すると3つの考え方に分けることができると思う。

1つは、しつけの内容に重点をおき、しつけが成人の子どもに対する外からの強制—他律的であるという考え方。2つ目は、しつけをメカニズムでとらえ、子どもを社会秩序に適応するように方向づけながら、子どもの行為を内面化させ、社会化をはかるという考え方。3つ目は、しつけが親から子どもへの一方的な働きかけでなく、子ども自身も学習し変化・発展していくという成人と子

どもの関係発展からしつけをとらえる考え方などがあげられる。

そして、これらのしつけには発達という条件も加わってくるであろう。発達が伴わなければ、しつけは成立せず、いくら強制してもしつけの効果的形成を期待することは困難となってくる。

次に性差について考えてみると、性差は、生物学的（第一次）性差と、それが発展・強化された社会的（第二次）性差、そして生物学的性差とはほとんど関係がないほど人為的に仕上げられた文化的（第三次）性差が含まれ、それらが関連しあって「男らしさ」「女らしさ」を形成していると思われる。だから男らしさ、女らしさといった基準は、時代、社会、受け取る人間によって異なってくるであろう。

以上のことから、しつけと性差の関連を考えてみると2つの観点からとらえることができると思われる。1つは、しつけが社会にある様々な性差を作り出している1つの要因である、といったとらえ方で、大人が社会的な性別役割にあわせて、しつけの内容を時代、社会的背景によって規制するという見方である。

もう1つは、子どもが自分は男である、女であるといった性差を自覚することによって、しつけの内容が決まってくるといった観点である。つまり子どもが性にあわないと思われる行動をとった時に、親は子どもを叱ったり、注意したりする。それを体験したり、見たりしていく中で子ども自身が性を自覚してくると、その性にあわないと思っただ行動を自制するようになってくる。子ども自身が自分で身につけていくものもしつけの一部であると考えれば、このようなしつけにおいても性差は明確になっていくのではないだろうか。このようにして、しつけと性差は相互に影響をおよぼしあっていると思われる。

(2) しつけにおける性差の変遷

しつけにおける性差が、どのように移り変わってきたかを見ると、およそ次のようになる。

自給経済社会が日本の根底をなしていた時代は、80%が農民であった。この時代において、しつけの目標や内容は、子どもを生産者として「一人前」にすることであった。これは単に生産技術や方法を

を教えるだけでなく、仕事に対する姿勢や心構え、判断力などの内容も含まれていた。労働に対するしつけは、性差がなく、男女共に行われた。しかし、女子のしつけは、農作業に加えて、炊事、機織りなど家庭的な手作業の一切を行い、素直で、おとなしく、従順である事といった条件が加わったのであった。そして武家のしつけは、男子に文武の修業、日常の礼儀作法、言葉づかい、物事の処理の仕方、家風や家芸が伝えられた。特に男子は、指導者としての能力と責任感を持つことが理想とされた。女子は、常に男子につきあえ、順従で和をもって家をしっかりと守り、子孫を育てていくようにしつけられた。この良妻賢母教育思想が女子のしつけにおける基礎となっている。これらのしつけ教育は明治に入っても、本質的に大差はないように思われる。

戦後になると、しつけは大きな変化をとげはじめた。その要因は、特に次の3つをあげることができる。第1は、敗戦を機に行われたこれまでの道徳規範の否定と民主的価値規範の取り入れである。第2は、経済の発展に伴う産業構造の変化と就労構造の変化である。第3は、核家族の進行や子ども数の減少など家族構成上の変動である。

これらの要因によって起ったしつけの変化は、様々な問題を投げかけているといえよう。しつけの目標、方法、内容も変化し、男女のしつけも変わってきていると思われる。

しかし現在でも、青少年期を通して基本的な生活習慣のしつけには、性差はほとんど見られないが、男子には自立心、活動性、学習といった将来への期待が込められた外向的なしつけが多く、女子には家事作業、礼儀作法といった内向的なしつけが行われているようである。本研究では、このような伝統的な性別によるしつけが、どの程度変容しているのか、その実態を明らかにするため調査を実施した。

3. しつけの性差についての調査研究

(1) 調査目的

本研究の目的であるしつけにおける男女の差が現在どのように行われているか、母親のしつけ、父親のしつけ、子どもの受け取り方の差異、地域

性、子どもの年齢による差について実態と意識を明らかにする。

(2) 調査方法

1) 調査期間

予備調査 1983年 7月上旬

本調査 1983年 9月上旬

2) 調査方法

性差が現れるだろうと思われるしつけ項目を文献から採集し調査票を作成した。予備調査を行い、性差が現れなかった項目を除外し、調査票を修正し本調査を行った。調査票は各学校に配布し、約1週間後に回収した。

3) 調査対象

予備調査 愛知県春日井市内にある小学校5年生の男子19人、女子20人、母親39人を対象とした。

本調査 都市部として愛知県春日井市内のA小学校4年生、6年生の児童とその母親、父親、B中学校2年生の生徒と母親を対象とした。農山村部として岐阜県武儀郡洞戸村のC、D2つの小学校4年生と6年生の児童とその母親、E中学校1～3年生の生徒とその母親を対象とした。人数は表一1の通りである。回収率は、子ども98.5%、母親97.0%、父親98.9%であった。

表一1 調査対象者

子ども・親・地域・性	子ども				母		父
	都市部		農山村部		都市部	農山村部	都市部
学年	男	女	男	女			
小学4年生	56	42	23	27	181	87	181
小学6年生	53	30	21	18			
中学生	69	55	65	69	124	107	
合計	305		223		305	194	181
	528				499		

親の調査対象が、母親499人に対して父親181人と少ないのは、調査依頼校側の事情による。本研究では母親を中心に考え、父親の調査は参考程度にとどめた。

4) 調査内容

子ども用の調査内容は、対象の属性としつけられている実態について33項目。母親、父親用は、属性としつけの程度と子どもの実態について33項目、望ましい子ども像、進学期待について、である。(表一2)

しつけ内容の33項目は、基本的生活習慣、礼儀

作法、手伝い、対人対物関係、身辺生活の自立、学習、安全の領域に分類してある。しつけの程度は3段階、子どもの実態は「できている」か「できていない」かで尋ねた。結果の集計は、3段階の程度に、厳しい順から1, 2, 3点を与え得点化し集計、検定を試みた。

表一2 調査項目

項目	項目
基本的生活習慣	対人対物関係
歯みがき・手・顔を洗う 礼儀作法 「おはよう」などのあいさつをする ドアの開け方、閉め方 タタミ・イスに座る座り方 バスなどの順番を待つ時の並び方 茶わんやはしの持ち方 丁寧なことばの使い方 「ありがとう」とお礼をいう	友だちと仲よくする 小さい子をいじめない 親との約束を守る 人前ではっきりものをいう いつまでも泣かない 出しゃばってはいけない 年上の子のいうことは素直に聞く 乱暴なことをしない
手伝い	おもちゃ、本を大切に 家に帰る時間を守る あの子と遊んではいけない など友についていう
料理を作る手伝いをする 食事のあとかたづけの手伝いをする 家のそうじの手伝いをする 重い荷物、大工仕事の手伝いをする お客さんへお茶を出す手伝いをする 食事材料の買い物をする	自立 自分の身の回りのかたづけ おこづかい帳をつける お金の使い方 困難なことでも自分で だらしない身なりをしない
学習	安全 危険なことをしない
そろばん、ピアノなどの塾へ行く 家で学校の勉強をする	

(3) 調査結果と考察

1) 親のしつけに対する子どもの意識

男女差の認められたしつけ項目をみると、表一3のようになる。

表一3 子どもの意識の男女差

項目	男平均	女平均	P	性差	
歯みがき、手、顔を洗う	2.23	2.52	**	男>女	
バスなどの順番を待つ時の並び方	2.82	2.90	**		
重い荷物、大工仕事の手伝いをする	2.36	2.81	**		
自分の身の回りのかたづけをする	1.74	1.95	**		
お金の使い方	2.21	2.36	**		
家で学校の勉強をする	2.00	2.15	**		
あの子と遊んではいけないなど、友についていう	2.76	2.88	**		
タタミ、イスに座る座り方	2.66	2.44	**		女>男
料理を作る手伝いをする	2.69	2.36	**		
食事のあとかたづけの手伝いをする	2.57	2.25	**		
お客さんへお茶を出す手伝いをする	2.82	2.55	**		
丁寧なことばの使い方	2.43	2.16	**		

注) *P<0.05. **P<0.01で有意差あり、(以下同じ)

男子は女子より、基本的な生活習慣、身近生活の自立、学習などについて有意に厳しいと感じている。それに対して女子は男子より、礼儀作法、家事手伝いといった伝統的しつけ項目において有意に厳しいと感じている。

地域別に男女差のある項目は表一4、5のようになる。表一4は都市部における男女差の結果であるが、これは子ども全体の男女差とほぼ同様である。男子の方が有意に厳しいと感じている項目は、農山村部より都市部の方が多くなっている。それに比べ女子は、有意に厳しいと感じている項目が都市部と農山村部で同じになっている。

表一4 都市部の子どもの男女差

項目	男平均	女平均	P	性差	Z検定結果	
					P	地域差
歯みがき, 手, 顔を洗う	2.23	2.44	**	男>女		都>農
バスなどの順番を待つ時の並び方	2.76	2.89	*			
重い荷物, 大工仕事の手伝いをする	2.38	2.76	**			
自分の身の回りのかたづけをする	1.65	1.90	**			
おこづかい帳をつける	2.66	2.81	*			
あの子と遊んではいけないなど, 友についていう	2.73	2.90	**	女>男		農>都
タタミ, イスに座る座り方	2.71	2.48	**			
料理を作る手伝いをする	2.70	2.34	**			
食事のあとかたづけの手伝いをする	2.49	2.18	**			
お客さんへお茶を出す手伝いをする	2.83	2.63	**			
丁寧なことばの使い方	2.39	2.15	**			

表一5 農山村部の子どもの男女差

項目	男平均	女平均	P	性差	Z検定結果	
					P	地域差
歯みがき, 手, 顔を洗う	2.24	2.61	**	男>女		
重い荷物, 大工仕事の手伝いをする	2.34	2.87	**			
家で学校の勉強をする	1.93	2.15	*			
タタミ, イスに座る座り方	2.57	2.39	*	女>男		
料理を作る手伝いをする	2.66	2.37	**			
食事のあとかたづけの手伝いをする	2.69	2.34	**			
お客さんへお茶を出す手伝いをする	2.80	2.47	**			
丁寧なことばの使い方	2.48	2.17	*			

表一6、7は都市の男子と農山村の男子：都市の女子と農山村の女子について比較した結果である。

男子は都市部に有意に厳しい項目が多くなっている。それらの内容は、身近生活の自立や対人関係である。女子についても都市部に有意な項目が多い。「お客さんへお茶を出す手伝い」だけが農山村部の女子の方が有意に厳しいと感じているだけである。しかし全て5%有意水準であり、男子

表一6 男子のしつけの地域差

項目	都市男子	農山村男子	Z検定結果	
	平均	平均	P	地域差
「おはよう」などのあいさつをする	2.53	2.69	*	都>農
食事のあとかたづけの手伝い	2.47	2.69	**	
自分の身の回りのかたづけ	1.65	1.89	**	
おこづかい帳をつける	2.66	2.82	*	
人前ではっきりとものをいう	2.27	2.50	**	
出しゃばってはいけない	2.67	2.81	*	
年上の子のいうことは素直に聞く	2.62	2.77	*	
だらしない身なりをしない	2.20	2.47	**	

表一7 女子のしつけの地域差

項目	都市女子	農山村女子	Z検定結果	
	平均	平均	P	地域差
歯みがき, 手, 顔を洗う	2.44	2.61	*	都>農
重い荷物, 大工仕事の手伝い	2.76	2.87	*	
いつまでも泣かない	2.71	2.85	*	
年上の子のいうことは素直に聞く	2.65	2.81	*	
乱暴なことをしない	2.48	2.66	*	
家に帰る時間を守る	2.29	2.50	*	
お客さんへお茶を出す手伝い	2.63	2.47	*	

に比べあまり差はみられない。

都市部の子どもは男女共に農山村部と比べ親からよく注意を受けていると感じている。特に男子はその傾向が強いと思われる。農山村部の子どもの方が、親に対して従順であるのだろうか。また女子は、両地域とも家事内容のしつけにおいて男子と差が出てきており、伝統的な女性の役割を身につけるしつけが行われていると思われる。

2) 親の意識

父母の年齢は表一8、9のようになる。男女の父母の年齢にほとんど差は認められない。

表一8 母の年齢

年齢	性		性		全体	%
	男子の母	%	女子の母	%		
24歳以下	1	0.4	0	0.0	1	0.2
25～29	1	0.4	1	0.5	2	0.4
30～34	37	14.0	38	17.0	75	15.4
35～39	128	48.5	82	36.9	210	43.3
40～44	72	27.3	81	36.5	153	31.5
45～49	16	6.1	17	7.7	33	6.8
50～54	4	1.5	2	0.9	6	1.2
55～59	0	0.0	0	0.0	0	0.0
60以上	1	0.4	1	0.5	2	0.4
N. A.	4	1.5	0	0.0	4	0.8
計	264	54.3	222	45.7	486	100.0
平均	38.7歳		38.9歳		38.7歳	

表一9 父の年齢

年齢	性		%		全体	
	男子の母	%	女子の母	%	全体	%
24歳以下	0	0.0	0	0.0	0	0.0
25～29	0	0.0	0	0.0	0	0.0
30～34	19	7.2	8	3.6	27	5.6
35～39	54	20.5	43	19.4	99	20.0
40～44	119	45.0	97	43.7	216	44.4
45～49	52	19.7	57	25.7	109	22.4
50～54	13	4.9	9	4.1	22	4.5
55～59	1	0.4	2	0.9	3	0.6
60以上	1	0.4	0	0.0	1	0.2
N. A.	5	1.9	6	2.6	11	2.3
計	264	54.3	222	45.7	486	100.0
平均	41.9歳		42.5歳		42.3歳	

父母の職業、就労状況は、地域で差が現れている。父の職業は、都市部で「管理職」「事務職」「専門職」が多く、農山村部で「労務職」といった身体を使った職業が多くなっている。母の就労は、都市部で「主婦専業」31.5%「パートタイム」28.9%が多く、農山村部では「内職」36.7%「家業の手伝い」25.0%が多く、「主婦専業」は6.9%とわずかである。家業の手伝いは兼業農家が多いため母が農作業を行っていると考えられる。農山村部では、女性も働く事があたり前であった以前の考えが残っているためではないだろうか。

子どもの頃育った所については、都市部にいろいろな地域で育った人が集まっており、農山村部は、ほとんどこの地域や近隣の地域で育っていると思われる。

また親との同居は、都市部12%、農山村部50%となっている。都市部では核家族型、農山村部では拡大家族型といった家族形態の傾向が強い。全体的に農山村部は以前の形態を多く留めており、それらはしつけにも影響を与えていると思われる。

(i) しつけの実態について

A. 母親のしつけに対する意識

男女別にしつけ程度の厳しい項目をあげると表一10のようになる。

しつけ内容に大差はみられないが、男子には、「危険なことをしない」「お金の使い方」が入っている。女子は「親との約束を守る」「タタミ・イスに座る座り方」が男子と異なっている。表一10にあげられる項目は、男子ができていない割合が低いから、しつけが厳しく行われている。

次に男女間に有意な差が認められた項目を取り出すと表一11のようになる。

表一10 母親のしつけ程度の厳しい項目（男子）

順位	項目	平均点	できている割合
1	「ありがとう」とお礼をいう	1.37	84.8
2	歯みがき、手、顔を洗う	1.41	77.7
3	おもちゃ・本などを大切に	1.44	48.9
4	自分の身の回りのかたづけをする	1.45	34.5
5	危険なことをしない	1.46	86.4
6	茶わんやはしの持ち方	1.47	70.5
6	お金の使い方	1.47	70.8
8	「おはよう」などのあいさつをする	1.49	76.1
9	家に帰る時間を守る	1.51	73.1
10	だらしない身なりをしない	1.52	85.6

(女子)

順位	項目	平均点	できている場合
1	自分の身の回りのかたづけをする	1.43	51.8
2	「ありがとう」とお礼をいう	1.45	88.3
3	歯みがき、手、顔を洗う	1.49	86.5
4	茶わんやはしの持ち方	1.52	76.6
5	おもちゃ・本などを大切に	1.55	75.7
5	家に帰る時間を守る	1.55	78.4
7	「おはよう」などのあいさつをする	1.57	91.4
7	親との約束を守る	1.57	64.4
9	だらしない身なりをしない	1.58	91.4
10	タタミ・イスに座る座り方	1.62	41.0

表一11 母親のしつけの性差

項目	男子の母	女子の母	Z検定結果	
	平均	平均	P	性差
バスなどの順番を待つ時の並び方	1.63	1.81	**	男>女
重い荷物、大工仕事の手伝い	2.37	2.62	**	
お金の使い方	1.47	1.68	**	
友だちと仲よくする	1.59	1.74	**	
小さい子をいじめない	1.57	1.79	**	
人前ではっきりとものをいう	1.60	1.72	**	
いつまでも泣かない	1.68	1.91	**	
乱暴なことをしない	1.58	1.84	**	
おもちゃ・本を大切に	1.44	1.55	*	
困難なことでも自分で	1.53	1.70	**	
家で学校の勉強をする	1.53	1.72	**	
危険なことをしない	1.46	1.67	**	
料理を作る手伝い	2.38	2.08	**	
食事のあとかたづけの手伝い	2.13	1.96	**	
お客さんへお茶を出す手伝い	2.55	2.22	**	
食材料の買い物の手伝い	2.28	2.15	*	

男子では「バスなどの順番を待つ時の並び方」「重い荷物、大工仕事の手伝い」「お金の使い方」「小さい子をいじめない」「いつまでも泣かない」「乱暴なことをしない」「困難なことでも自分で」「家で学校の勉強をする」「危険なことをしない」といった項目が、1%有意水準でより厳しくしつけられている。母親は女子よりも男子に対し、いじめ、乱暴な行為、または臆病な態度を否定し、独立心を養い、学習を奨励するしつけを行っていると思われる。

女子の方は「料理を作る手伝い」「食事のあと

かたづけの手伝い」「お客さんへお茶を出す手伝い」「食事材料の買い物の手伝い」といった家事作業の手伝いが1%または5%有意水準でより厳しくしつけられている。

これらの結果から女子よりも男子に対するしつけの方が、厳しく行われていることがわかる。これは以前の柏木氏他の調査(1971年~73年)で明らかにされた「母親の女子に対する女らしい子になるように期待する効果が、男子が男らしい子になる期待よりも高い」という結果に反するものである。しつけ項目が異なることもあると思われるが、しつけに対する考え方の変化といえるのではないだろうか。

次にしつけの領域別、項目別に男女差をみると表一12のようになる。手伝いの領域以外、全て男子の方が厳しくしつけが行われている。子どものできている割合は、全領域で男子の方が低くなっている。手伝いの領域だけは、女子の方が有意に厳しいと認められる。

全体的な男女のしつけを総合してみると、男子は活動的であるために「乱暴なことをしない」「危険なことをしない」「小さい子をいじめない」といった行動の制約が強くなってくるのであろう。一般的に男子が活発で活動的であるのは、生物学的なものと、社会的影響が加わったものからきていると思われる。そして親は男子により高い達成や期待を持ち、「勉強」「困難なことでも自分でする」といったしつけを行うのではないだろうか。学歴社会である現在、親は子に対して将来、社会的に良いと認められている職業につかせるために勉強などをしているのだと思われる。これは社会的に作られたものである。また、男子は生物学的に力が強いから「重い荷物、大工仕事の手伝い」を頼むのであろう。しかしそこには社会的役割分業による考えも大きく影響していると思われる。

次に女子のしつけを考えてみると、性差の現れた項目は家事作業の手伝いだけである。これは社会的役割分業に根ざしたものであると思われる。そしてこの役割分業は過去からずっと引き継がれてきているものである。以前は、女性が子を産み、母乳を与えるために女性は遠くへ働きに行くことができず、家の近くの仕事をしたという生物学的

表一12 領域別・項目別しつけ

領域	項目	男子		女子	
		しつけ程度 平均点	実態 できている割合	しつけ程度 平均点	実態 できている割合
基本的 生活習慣	歯みがき, 手, 顔を洗う	1.41	77.7	1.49	86.5
	平均	1.41	77.7	1.49	86.5
礼儀作法	「おはよう」などのあいさつをする	1.49	76.1	1.57	91.4
	ドアの開け方, 閉め方	1.59	70.8	1.69	68.0
	タタミ, イスに座る座り方	1.64	40.5	1.62	41.0
	バスなどの順番を待つ時の並び方	1.63	87.5	1.81	89.6
	茶わんやはしの持ち方	1.47	70.5	1.52	76.6
	丁寧なことばの使い方	1.78	39.8	1.77	40.5
	「ありがとう」とお礼をいう	1.37	84.8	1.45	88.3
平均	1.57	67.1	1.63	70.8	
手 伝 い	料理を作る手伝いをする	2.38	31.1	2.08	55.4
	食事のあとかたづけの手伝いをする	2.13	39.4	1.96	51.8
	家のそうじの手伝いをする	1.97	38.3	1.92	48.2
	重い荷物, 大工仕事の手伝いをする	2.33	35.6	2.62	14.0
	お客さんへお茶を出す手伝いをする	2.55	19.7	2.22	49.5
	食事材料の買い物の手伝いをする	2.28	52.3	2.15	60.8
平均	2.27	36.1	2.16	46.1	
対人・ 対物関係	友だちと仲よくする	1.59	90.9	1.74	93.2
	小さい子をいじめない	1.57	90.5	1.79	90.1
	親との約束を守る	1.53	68.2	1.57	64.4
	人前ではっきりものをいう	1.60	53.0	1.72	53.6
	いつまでも泣かない	1.68	70.1	1.91	70.7
	出しゃばってはいけない	1.97	61.4	2.03	68.9
	年上の子のいうことは素直に聞く	1.95	71.6	2.02	78.4
	乱暴なことばはしない	1.58	79.9	1.84	79.7
	おもちゃ・本などを大切に使う	1.44	48.9	1.55	75.5
	家に帰る時間を守る	1.51	73.1	1.55	78.4
あの子と遊んではいけ ないなど友についていう	2.36	73.1	2.36	78.8	
平均	1.71	71.0	1.83	75.6	
自 立	自分の身の回りをかたづける	1.45	34.5	1.43	51.8
	おこづかい帳をつける	2.30	16.7	2.30	24.3
	お金の使い方	1.47	70.8	1.68	78.4
	困難なことでも自分でする	1.53	49.6	1.70	53.6
	だらしのない身なりをしない	1.52	85.6	1.58	91.4
平均	1.65	51.4	1.74	59.9	
学 習	そろばんピアノなどの塾へ行く	2.09	37.1	2.07	57.7
	家で学校の勉強をする	1.53	72.0	1.72	83.8
平均	1.81	54.6	1.90	70.8	
安 全	危険なことばはしない	1.46	86.4	1.67	91.4
	平均	1.46	86.4	1.67	91.4

なもののからこの役割分業が生まれたといわれている。現在では、人工乳で子どもは育つ（これがよいこととは思わないが）ため近くだけにいる必要はなくなったのであるが、以前の役割分業が人々の意識の中に今もそのまま残存しているのである。現在これは、社会的に作られたものであるといえよう。また、家事作業の手伝いの項目において、女子のできている割合が高いのは、子ども自身も女子の役割であると受け取り、自主的に行っていると考えられる。

地域別に男女のしつけで性差がある項目は、表-13, 14である。

表-13 都市の母親のしつけの性差

項 目	男子の母	女子の母	Z検定結果			
	平均	平均	P	性差		
バスなどの順番を待つ時の並び方	1.48	1.72	***		男>女	
重い荷物、大工仕事の手伝い	2.43	2.65	***			
お金の使い方	1.46	1.72	***			
友だちと仲よくする	1.56	1.77	***			
小さい子をいじめない	1.50	1.83	***			
いつまでも泣かない	1.67	1.86	*			
年上の子のいうことは素直に聞く	1.92	2.08	*			
乱暴なことをしない	1.53	1.89	***			
困難なことでも自分でする	1.49	1.69	***			
家で学校の勉強をする	1.57	1.75	***			
危険な事をしない	1.41	1.72	***			
料理を作る手伝い	2.39	2.14	***			女>男
お客さんへお茶を出す手伝い	2.57	2.29	***			
食材材料の買い物の手伝い	2.32	2.17	*			

表-14 農山村の母親のしつけの性差

項 目	男子の母	女子の母	Z検定結果		
	平均	平均	P	性差	
重い荷物、大工仕事の手伝い	2.16	2.58	***		男>女
いつまでも泣かない	1.70	1.98	***		
家で学校の勉強をする	1.45	1.68	***		
料理を作る手伝い	2.37	2.00	***		女>男
食事のあとかたづけの手伝い	2.14	1.94	*		
お客さんへお茶を出す手伝い	2.48	2.13	***		

都市の男女に差が現れたものは、男女全体の結果とほぼ同様である。それに対し農山村では、都市に比べ性差の現れたものは少なくなっている。特に男子は「重い荷物、大工仕事の手伝い」「いつまでも泣かない」「家で学校の勉強をする」の3項目しか認められない。

さらに男子、女子別にしつけの地域差をみたのが表-15, 16である。

表-15 男子の母親のしつけの地域差

項 目	都市の母	農山村の母	Z検定結果	
	平均	平均	P	地域差
バスなどの順番を待つ時の並び方	1.48	1.89	***	都>農
茶わんやはしの持ち方	1.40	1.59	*	
小さい子をいじめない	1.50	1.71	*	
親との約束を守る	1.46	1.67	***	
重い荷物、大工仕事の手伝い	2.43	2.16	***	農>都

表-16 女子の母親のしつけの地域差

項 目	都市の母	農山村の母	Z検定結果	
	平均	平均	P	地域差
バスなどの順番を待つ時の並び方	1.72	1.93	*	都>農
身の回りのかたづけをする	1.35	1.54	*	

これらからも男女共に都市の母親のしつけが有意に厳しいことがわかる。農山村部の方が家族、就労形態など過去の部分が多く残っているので、都市部よりも以前の性差が多く残存していると思われたが、異なった結果であった。

B. 父親のしつけに対する意識

父親は都市部の小学生の父親のみである。表-17は性差が現れた項目である。

表-17 父親のしつけの性差

項 目	男子の父	女子の父	Z検定結果	
	平均	平均	P	性差
重い荷物、大工仕事の手伝い	2.41	2.67	***	男>女
料理を作る手伝い	2.62	2.18	***	女>男
食事のあとかたづけの手伝い	2.26	2.00	***	
そろばん、ピアノなどの塾へ行く	2.21	1.97	*	

母親と異なり、男子に対して1%有意水準で厳しいのは「重い荷物、大工仕事の手伝い」だけである。これは父親自身が、大工仕事などを行うからであろう。女子は、家事作業の手伝いと塾が厳しくしつけられている。また、母親と父親のしつけを比較してみると13項目にわたり、母親が有意に厳しくしつけを行っていることがわかる。都市部の小学生の親では、子どものしつけを全面的に母親へまかせている父の姿がうかがえるのではないだろうか。

(ii) 母親のしつけに影響を与える要因

表一18 しつけの参考とするもの(母親)

項目	順位		順位		順位		計	
	1位	%	2位	%	3位	%	計	%
あなた自身が受けたしつけ	173	35.6	83	17.1	68	14.0	324	22.2
夫の意見	106	21.8	125	25.7	50	10.3	281	19.3
両親の意見	30	6.2	34	7.0	42	8.6	106	7.3
幼稚園、学校の先生	85	17.5	70	17.5	70	14.4	240	16.5
友人・隣人	3	0.6	22	4.5	61	12.6	86	5.9
家庭学級	19	3.9	36	7.4	42	8.6	97	6.7
専門書	5	1.0	4	0.8	10	2.1	19	1.3
育児雑誌	1	0.2	1	0.2	9	1.9	11	0.8
テレビ・ラジオ	21	4.3	53	10.9	74	15.2	148	10.2
その他	11	2.3	2	0.4	8	1.7	21	1.4
N. A.	32	6.6	41	8.4	52	10.7	125	8.6
計	486		486		486		1458	100.0

①母親がしつけの参考としているものを3位まであげると表一18のようになる。

1位は「あなた自身が受けたしつけ」、2位「夫の意見」、3位「幼稚園、学校の先生」となっている。

親は自分自身が受けたしつけを参考に、しつけを行っているとするれば、しつけは親から子へと引き継がれていくことになる。そこに夫の考えやテレビ、ラジオなど社会的影響が加わり、引き継がれてきたしつけが全く変化してしまうことも考えられるだろう。また学校の教師の意見も多く参考とされており、家庭で行われるしつけの一端を担っているといえよう。

②親から受けたしつけがどの程度自分の行うしつけに影響しているのかを地域別にみると表一19のようになる。

表一19 親からのしつけの影響

項目	都市		農山村		全体	
	数	%	数	%	数	%
非常にある	126	42.3	55	29.3	181	37.2
一部ある	141	47.3	95	50.5	236	48.6
影響はない	14	4.7	15	8.0	29	6.0
その他	0	0.0	0	0.0	0	0.0
N. A.	17	5.7	23	12.2	40	8.2
計	298	61.3	188	38.7	486	100.0

親からの影響が「非常にある」と答えた者は都市部の方が多くなっている。「影響はない」と答えた者は農山村部の方が多い。全体的には「非常にある」「一部ある」をあわせると約85%に達し、ほとんどが親から何らかの影響を受けていると思

われる。都市部の方が特に強いと感じているようだが、親と同居していない人が多いからであろうか。

しつけについて夫と妻のどちらの考えが強いかを尋ねた結果が表一20である。

表一20 しつけの考えの強さ

項目	都市		農山村		全体	
	数	%	数	%	数	%
夫の考えが強い	58	19.5	50	26.6	108	22.2
妻の考えが強い	99	33.2	53	28.2	152	31.3
夫・妻同じ程度	135	45.3	80	42.6	215	44.2
その他	0	0.0	3	1.6	3	0.6
N. A.	6	2.0	2	1.1	8	1.6
計	298	61.3	188	38.7	486	100.0

しつけの考えの強さは、都市部、農山村部共に夫、妻が同じ程度と考えている者が多い。しかし、しつけ内容で13項目にわたって妻の方が有意に厳しかったように、実際は夫よりも妻の考えが強くなっているのではないかと思う。

(iii) 母親の期待する子ども像

①子どもへの進学期待を地域別、男女別にあげたものが表一21である。

表一21 子への進学期待

項目	都市		農山村	
	数	%	数	%
中学校	0	0.0	3	1.6
高校	54	18.1	91	48.4
短大	34	11.4	17	9.0
大学	161	54.0	37	19.7
大学院	9	3.0	2	1.1
高校→専門学校	28	9.4	25	13.3
その他	10	3.4	11	5.9
N. A.	2	0.7	2	1.1
計	298	61.3	188	38.7
男子	140	53.0	198	40.7
女子	158	53.0	90	38.7
計	298	61.3	188	38.7

地域別では、都市部の方がはるかに高学歴を望んでいる。農山村部は約50%が高校まででよいと考えているのに対し、都市部は50%以上が大学進学を希望している。男女別にみると、男子には大学進学を50%以上が望んでおり、高学歴を期待し

ている。女子は短大と大学をあわせると50%近くになるが、親は女子よりも男子に対して高い学歴を期待していることがうかがえるのではないかと思う。

②理想の子ども像についてまとめたものが表-22, 23である。

理想の男子像についてみると、1位は「責任感が強い子」2位「思いやりがある子」3位「忍耐力がある子」といった順位である。これは男子の母も女子の母も同様の考えである。これらの理想像を総合すると男子は、責任と忍耐力があり勇氣をもって行動でき、その中に他を思いやる心を秘めた子ということになる。

それに対し理想の女子像は、1位「思いやりがある子」2位「素直な子」3位「責任感が強い子」である。男子の母は3位に「明朗な子」4位「やさしい子」を選んでおり、女子の母と多少異なっている。男子の母は、女子に対しより「女らしさ」

を求め、女子の母は「責任」や「忍耐」といった理想の男子と同じ項目を選択しており、女子も男子も変わらないという考えを持っていると思われる。ここに男子の母と女子の母の考え方にズレがみられる。

原芳男氏他による「男らしさ、女らしさの調査」(1967年、東京)の男らしさの条件、女らしさの条件と本調査を比較してみると次のようになる。男らしさの条件は、1位「忍耐力」2位「勇氣」3位「思いやり」といった順位である。これは本調査による理想の男子像にあてはまる。女らしさの条件のうち本調査と共通の項目は1位「やさしさ」2位「親切」3位「清潔」5位「明朗」7位「思いやり」である。

これらの結果から、親は理想の子ども像に男らしさ、女らしさを求めており、この条件は、表面的なものよりも、内面的なものが多く求められているといえる。

表-22 理想の子ども像

項目	理想の男子像				理想の女子像				理想の男子像		理想の女子像					
	男子の母	%	女子の母	%	計	%	男子の母	%	女子の母	%	計	%	父	%	父	%
思いやりがある子	158	19.9	83	12.5	241	16.4	113	14.3	176	26.4	289	19.8	57	10.7	100	18.7
明朗な子	26	3.3	18	2.7	44	3.0	48	6.1	60	9.0	108	7.4	26	4.8	62	11.6
勇氣がある子	48	6.1	37	5.6	85	5.8	3	0.4	7	1.1	34	2.3	37	6.9	6	1.1
責任感が強い子	162	20.5	96	14.4	258	17.7	38	4.8	86	12.9	124	8.5	97	18.2	29	5.4
行動力がある子	63	8.0	48	7.2	111	7.6	8	1.0	18	2.7	26	1.8	56	10.5	10	1.9
やさしい子	9	1.1	8	1.2	17	1.2	44	5.6	45	6.8	89	6.1	2	0.4	43	8.1
協調的な子	13	1.6	6	0.9	18	1.2	15	1.9	19	2.9	34	2.3	7	1.3	21	3.9
創造力がある子	21	2.7	15	2.3	36	2.5	9	1.1	14	2.1	23	1.6	38	7.1	15	2.8
忍耐力がある子	131	16.5	71	10.7	202	13.9	32	4.0	78	11.7	110	7.5	59	11.1	33	6.2
勉強ができる子	14	1.8	6	0.9	20	1.4	5	0.6	5	0.8	10	0.7	7	1.3	5	0.9
スポーツができる子	48	6.1	23	3.5	71	4.9	7	0.9	6	0.9	13	0.9	25	4.7	6	1.1
親切な子	8	1.0	6	0.9	14	1.0	17	2.1	15	2.3	29	2.0	3	0.6	9	1.7
活発な子	4	0.5	3	0.5	7	0.5	2	0.3	6	0.9	8	0.5	6	1.1	6	1.1
素直な子	47	5.9	23	3.5	70	4.8	56	7.1	89	13.4	145	9.9	13	2.4	45	8.4
N・A.	41	5.2	223	33.5	264	18.1	395	49.9	42	6.3	437	30.0	101	18.9	144	27.0
計	792	54.3	666	45.7	1458	100.0	792	54.3	666	45.7	1458	100.0	534	100.0	534	100.0

表-23 理想の子ども像の順位

順位	理想の男子像			理想の女子像			理想の男子像		理想の女子像	
	男子の母	女子の母	母	男子の母	女子の母	母	父	父		
1	責任感が強い子	責任感が強い子	責任感が強い子	思いやりがある子	思いやりがある子	思いやりがある子	責任感が強い子	思いやりがある子		
2	思いやりがある子	思いやりがある子	思いやりがある子	素直な子	素直な子	素直な子	忍耐力がある子	明朗な子		
3	忍耐力がある子	忍耐力がある子	忍耐力がある子	明朗な子	責任感が強い子	責任感が強い子	思いやりがある子	素直な子		
4	行動力がある子	行動力がある子	行動力がある子	やさしい子	忍耐力がある子	忍耐力がある子	行動力がある子	やさしい子		
5	勇氣がある子	勇氣がある子	勇氣がある子	責任感が強い子	明朗な子	明朗な子	創造力がある子	忍耐力がある子		
5	スポーツができる子									

3) 親と子のしつけの厳しさの意識差

親のしつけ程度と子の受け取り方にズレが生じているかどうかを知るために平均値の有意差の検定を行ったところ、全項目で親の意識の方が1%有意水準で厳しくなっている。つまり親が子どもに厳しく注意を行ったり、叱ったりしていると思っても、子どもの方は、それほど注意されたり、厳しいと感じてはいないということになる。やはり親と子の間には大きなズレが生じていると思われる。男子と女子を比べると、男子より女子の方がズレが少さくなっている。子どもにとって親の

だから日常家庭で母親が行うしつけの中にも性差によるしつけの違いが現れてくると思われる。

本調査結果でも、家事作業のしつけ、学習のしつけ、自立心のしつけなどに性差がみられた。

女子に対する家事作業のしつけは、以前と比べものにならないほどその必要性が低下している。これは縫い物・紡み・績ぎなど過去において絶対に必要であったしつけ内容が現代社会では、まったく必要性を認めないからであろう。しかし家事作業が単純になってきても、そのしつけは女子に多く行われ、家事作業が女子の役割であるといった考えが残っているのである。

また過去において男子は、一人前に仕事をし、一家の主として親の仕事を受け継ぎ、家を支えて行かなければならなかった。しかし現在は過去に比べ、自立する時期が遅くなっており、一人前に仕事ができるようになるための教育は、家庭外で行われるようになった。このため以前より明確なしつけが行われなくなったと思われる。本調査結果では、男子に高学歴など高い達成を望んでおり、男子は一家を支えて行かなければならないといった考えは強い。その他過去にしつけの性差があった「女子は常に男子に任える」「服装」などについては、ほとんど性差がなくなっている。

しつけは過去において子どもが親の仕事を手伝うといった労働を通して行われていた。それに対し、現在の親は手伝いをさせることにあまり積極的でなく、親の働いている姿を見せてしつけをしようとするよりも、口で言ってしつけを行っているように思われる。そのため、親と子どもの受けとめ方に大きな差異が生じるのであろう。ズレが生じる原因は色々あるが、しつけを行う親は、自分が過去に受けたしつけを基に現在のしつけを行っている人が多かった。親の基にするのは過去のしつけであり、子どもは現在に生きている。過去と現在というこのズレが一つの原因ともいえるだろう。

地域によるしつけの差は、過去の要素が多く残存している農山村部に性差が多く現れるのではないかと思われた。しかし調査結果は、農山村部よりもしつけが厳しく行われている都市部に多く現れた。地域差というよりもしつけが厳しくなれば

表一24 母子の差がとくに大きい項目(差1点以上)

項目	子の平均点	母の平均点
「おはよう」などのあいさつをする	2.58	1.50
ドアの開け方、閉め方	2.63	1.58
バスなどの順番を待つ時の並び方	2.83	1.61
茶わんや、はしの持ち方	2.47	1.44
小さい子をいじめない	2.66	1.62
いつまでも泣かない	2.78	1.71
「ありがとう」とお礼をいう	2.42	1.36
そろばんやピアノなどの塾へ行く	2.62	1.41

注意はあたり前であり普通の状態となっており、あまり気にしなくなったために、このような結果となったのではないだろうか。特に男子においてこの傾向が強いといえよう。

4. まとめ

文献及び調査研究によってしつけと性差の関係を歴史的な変遷と現状について考察してきた。その結果から過去と現在のしつけを比較、検討してみると次のようなことがいえる。

過去のしつけは、子どもをその時代の「一人前」にしつけることであった。しつけは村や組など地域社会で決められた方法によって、決められた役割を果たす人間にしつけられる公のものであると考えられていた。しかし現在のしつけは、社会人として個性をもち、独立した人間にすることがしつけの中心とされ、しつけは個人中心的なものと考えられている。従って過去には、男の子らしさ、女の子らしさが強調され、しつけの性差も明確であったが、現在では表面的にはほとんど消え去ろうとしている。しかし実際のところ家庭生活や社会生活における男女の役割、地位には差別がある。

なるほど性差は現れてくるようである。

しかし、本調査では母親が子どもに向かって「男の子のくせに……」「女の子がそんなこと……」といった「男の子」「女の子」のしつけについて明確に引き出すことはできなかった。だが日常生活の中でこのような言葉を耳にすることがある以上、しつけに性差は存在すると思われる。だから、しつけの内容が1つずつ男子のしつけ、女子のしつけに分かれるのではなく、性差はしつけの厳しさの程度の差に現れてくるのではないかと思う。そこで、これらを今後の課題とし、対象児の年齢の巾を広げ、また、幼児期から青年期に至る発達差や地域差についても研究していきたいと思う。

引用・参考文献

- 1) 祖父江, 米山, 野口編: 文化人類学事典 ぎょうせい 1981
- 2) 関計夫: 男性的女性と女性的男性 児童心理学第22巻12号
- 3) 望月・木村編: 現代家族の危機 有斐閣選書 1980
- 4) 柏木恵子他: 親子関係の心理 有斐閣新書 1981
- 5) 原ひろ子・我妻洋: しつけ 弘文堂 1981
- 6) 原ひろ子: 子どもの文化人類学 晶文社 1982
- 7) J. ブルックス=ガン, Wシェンプ・マチュウズ: 性別役割 その形成と発達 家政教育社 1982
- 8) エレノア・モ・マッコビィ: 性差 その起原と役割 家政教育社 1981
- 9) 山住正己・中江和徳: 子育ての書 1～3 巻 平凡社 1978
- 10) 和歌森太郎編: 陸前北部の民族 吉川弘文堂 1969
- 11) Corinne Hutt: Sex-role differentiation in social development, in Issues in childhood social development Methuen 1978

付 記

著者の一人である「津田聖子」は改姓し、現在は「三輪聖子」となっている。

(2011年10月24日)